

1. 本研究は、家族という生活共同体とその外郭である地縁集団をもふくめての生活共同体組織について考察を試みるものである。

2. 自然発生的に形成された旧村落の農家について、その変貌の姿をとらえ、狭義の生活共同体結合の契機について、まず検討を行なった。対象として、東京都世田谷地区の旧地主階層M家、S家、H家、旧小作農A家をえらんだ。

3. M、S、H、Aの農家は、戦前は、稲作、麦作、養蚕に多くの労働力を要し、生活共同体は、それを支える経済基盤の確立に労働力の結集を不可欠とした。たとえば、旧小作農A家の10人の子供は、昭和34年頃までは、A家の生活を支える労働力であり、しかもA家の各人は、A家という生活共同体の中において生活が可能であった。しかるに昭和35年以降は、M、S、H、Aいずれの農家においても、果樹をうえて農地としての形態を維持するにとどまり、生業は、アパートと印刷業経営(M)、ゴルフ練習場と保育園経営(S)、アパートとへら鮎釣堀経営(H)、電気関係の部品製造の下うけ(A)等に転換し、労働力は雇傭形態に移っている。その結果、生活共同体結合の強度は、質的变化をみせている。他方、日常の生活領域は「講中」を中心に一体的生活が維持され、生活共同体は、過渡的状态を示している。なお、隣接のH団地は、全く新しく編成された生活共同体の様相を示し、前者との交流は見出されない。